

テンカンポチェ峰北東壁登攀

馬 目 弘 仁 (松本CMC)

2008年11月14日AM10時45分、私達はネパール・クーンブ地方にあるテンカンポチェ峰(6,500m)に北東壁の新ルートから登頂することができた。

東氏(研修所専門職員)より予めテーマの指示をいただいたこともあり、ここでは登山内容の具体的報告ではなく、どのような考え方で事前の準備やトレーニングなどを行って成功に結びつけたかという要因についてまとめてみたいと思う。

・ちょっと酔ってます。

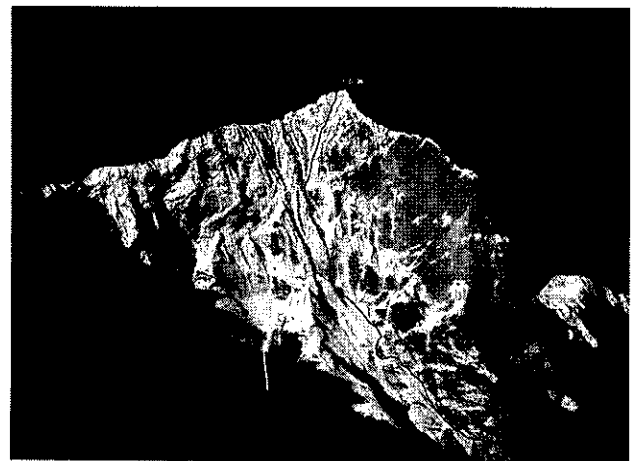
振り返ってみると、今までは遠征登山が終わる度にほろ苦い反省点ばかりを悩み考えてきたように思う。達成感に包まれ穏やかにベースでビールを味わうという登山はかなり真剣な夢であった。2006年から過去12年間にわたってメルー峰北東壁シャークスフィンに4度の挑戦を行った。それは感動的な登頂というかたちで結末を迎えることができたものの最大目標として狙い続けてきた獲物(ヘッドウォール完登)を逃したという気持ちも少しばかり残ってしまった。

今回は、全てがスマートだったと思う。放たれた矢がまっすぐに的を得るように。たまには心地よく成功について考察してみても罰は当たらないのではないだろうか。(と、願いたい。)多分に増長しているなと思われところも多々あるかもしれない。そんな部分はどうか過去に痛い思いを続けてきた者の性としてご容赦いただければ幸いと思う。

・スタイル

どうしても登りたい山や壁があったとしよう。達成するにはどういうスタイルで登るのが最適なのだろうか。タクティクスをどう考えるか……。そんな登山の核となる重要な部分を目標に合わせて後から考えていくというのが今までの自分であった。(と、思う。)今回は「ヒマラヤのミックスマス壁にアルパインスタイルでオリジナルなラインを引く」という強い思いが先にあった。今度ばかりは私達の情熱に山が後からついてくるものだと考えていた。パートナーは既に決まっていた。メルー峰遠征での同輩、岡田康である。彼とは2006年の遠征終了直後から目指すべきスタイルについて意気投合し、今回の挑戦を計画することになった。

心の底からやってみたいと願うクライミングスタイルが最後まで核としてぶれなかったことが良い結果につながったのだろう。



・テンカンポチェを選ぶ

私自身、この4～5年間はとても充実したクラ

3. 海外登山記録

クライミングができていのように感じている。家族もちの立場となってからは20歳代の頃のように毎週のようにクライミングに出かけていくことはもうかなわなくなった。行けたとしてもほとんどが日帰り山行という状況だ。しかし量は減ってしまったが実践するクライミングの質が格段に進化したと感じる。一回の山行にかける意気込みも変わった。それは優秀な若手アルパインクライマーとともに登る機会が増えたことによると思う。彼らから影響を受けてアルパインクライミングに対する考え方も大きく進歩した。が、それだけではない。彼らの焼けどするくらいの情熱だ。年齢や経験年数など全く関係なく互いにアルパインクライマーとして敬意を払いあえる仲間と登ることは幸せなことだと思ふ。

半年くらいの間は私達の頭のなかには様々な山の名が浮んでは消えていった。当初は、繰り返したインドヒマラヤ遠征で馴染みとなったシ布林峰北壁が最初の候補だった。だが「それでいいのか。もっと上を目指すべきだろう。」という思いが沸々とたぎってきた。もっと挑戦すべきだ！とそういう気持ちに火がついたものだ。そんな折、岡田が大西氏より魅力的な山の写真の数々を提供していただいた。一発で目を引いたのが蒼氷に包まれたテンカンポチェ北西壁だった。この魅力的な壁を登ってみたい！とそう強く思うようになった。テンカンポチェに行こう。オリジナルなラインを引こうと即決した。

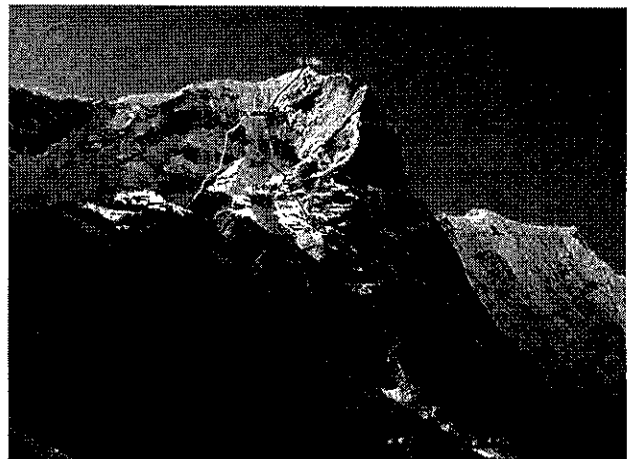
・トレーニング

こだわりをもって国内の冬季クライミングをすると驚くほどに楽しい。スタイルという程のことでもなく常識的なことではあるのだが取えて具体的な言葉にすると「ルート図や残置プロテクションに頼らず、己の壁を読む力をもとにルートを拓

きながらクライミングすること。」となるだろうか。この楽しみ方が非常に実践的なトレーニング&シュミレーションになった。

アルパインスタイルを志向するかぎり3ピッチのショートルートだろうがヒマラヤのでかい壁だろうがルートを拓くギアの数量は変わらない理屈になる。(変動するのは燃料や食料、若干の防寒ウェア位だろうか)ギアの量を決める要因は全体のルートの長さではなくピッチ毎の難しさである。極論をお許し願いたい、私達は常にヒマラヤでルート開拓する分のギアを用いて日本の壁を登り込んできたのである。北アルプス明神岳2263m峰周辺の壁や錫杖岳の壁は、そういう手ごたえを得るには絶好の岩場であった。(横山勝丘氏が山岳誌・岳人に「錫杖からカンテガへ」というタイトルで持論を展開している。再読をお勧めしたい。)

ヒマラヤ登山では実経験から得るものが非常に大きい。とくに高度順化や体調管理では全くそのとおりだと痛感さえしている。だがそれだけマスターすれば登れるものだろうか？少なくとも北東壁登攀を支えてくれた自信は、積み重ねてきた質の高い国内の冬季登攀から得たものであった。



・ラインが全て

身体は一つしかない。魅力的な登攀ラインはた

くさんあってもメニューからは一度に一つしか選べない。よく吟味しなければご馳走を逃しかねない。

テンカンポチェ峰には北東壁～北西壁まで魅力的なミックス壁が広がっている。はじめは迷わず北西壁の氷のラインを登ろうと考えた。だがそれは強力なスイスチームによって2008年4月に登られてしまうことになる。どうしよう？魅力的なラインでもあるし再登することも真剣に考えてもみた。それでもやはり未知のルートを開拓するという楽しみは捨てることは出来ない。「オリジナルなラインを引く」という思いは決して忘れない。そして北東壁が目標となった。

北東壁は美しい氷雪壁である。そこには壁のト真中に頂上へと一直線に伸びるルンゼが在る。しかしそれは下部が問題だ。いかにも悪相のスラブ帯に垂れるベルグラの氷瀑からはじまっている。それを迂回するには向かって右側の北壁側の岩稜 or 左側のリッジ交じりの氷雪壁を複雑にトラバースするしかない。

実際、私達に先行して総勢6名のスペイン隊がそれぞれ2～3パーティーに分かれてトライを開始していた。彼らは既に何本か試登を繰り返したものの頂上には至っていない。(私達がベース到着時にはベルグラの氷瀑からダイレクトに北東壁を登ろうとして敗退している。)ではベストスタートポイントはどこだろうか。ベースから真正面に見える北壁側の岩稜、これこそが鍵であった。

北壁そのものには過去3隊がトライしている。どの隊もカプセルスタイルを採用、未だ登頂するには至っていない。2005年の広島山の会チームは、プレという時期もあって降雪に悩まされ5,100m(最高到達点)までに日数を費やし大変

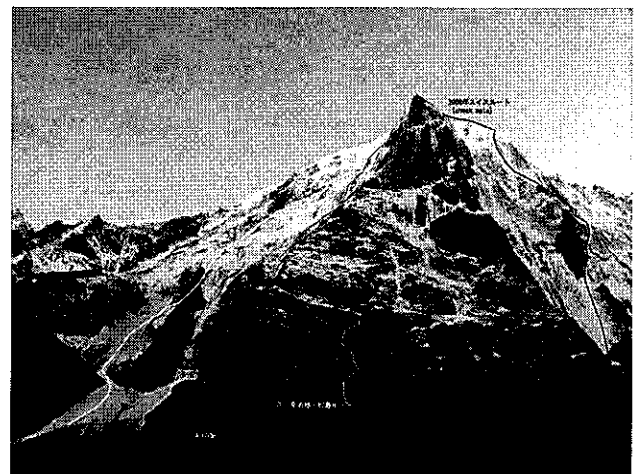
苦勞されたようだ。

アルパンスタイルでは壁の弱点を突くのが基本だと思う。通常の弱点といえば氷雪のラインであり頂上までそれをうまくつなげていくのがセオリーであろう。スペインチームがこの一見危なくて悪そうな北壁周辺からのスタートを選択しなかったのも十分理解できる話ではある。

だが私達は違った。あの岩稜は弱点であると読んだのである。標高差500m位の岩稜なら一日で抜けられると予想していた。それは大いに当たった。これには秘密兵器として高性能のフィールドスコープ(13～40倍ズーム)を持参したことも大きい。これはかなり高価なものだったが事前にルート概念を把握するには最高だった。

実際に観察すればするほど予想は確信に変わっていった。かなり傾斜が緩い。明神岳2,263m峰の壁に比べたら全然簡単ではないかと安心してルートに決定したものである。(取付点：4,600m～C1予定地：5,100mまで試登の際は7時間、本アタックでは5時間)

「ルート」というのはアルパインクライマーの意志の現れそのものだと思う。そしてラインを読むという最初の作業において実力の大半が現れるのではないかとも思う。



3. 海外登山記録

試行錯誤

計画から本番までの間に2回の冬シーズンがあった。その間、考えられる全てのことを試してみた。まずはシステムの問題がある。セカンドはフォローorユマーリング？ 荷揚げ用ザックは背負うor引上げ？ 行動中の水分補給はテルモスorガスコンロで沸かすか？ こういった課題はとにかくテンカンポチェの壁を具体的にイメージしながら実際の冬季クライミングでコツコツ検証していくしかない。

装備や食料の検証も同様だ。それこそ本番に持っていくものを細かく検証した。いいものがあるという情報があれば可能なかぎり入手し試してみた。私達は遊びに行くわけではない。挑戦しに行くのだという気持ちが常にあって、装備や食料くらい最高のものを用意しなければならないというも考えていた。私も含めアルパインクライマーの仲間たちはギアやウェア、食料に関する意見交換には実に熱心だ。どう改良すればより使いやすくなるのかを毎日考えている。他人の意見を参考に、試し、独自のアレンジを重ねる。自己の経験や実績にとらわれず頭の中を常に更新していく作業を通常のクライミングを通じて行っているのだろうと思う。

具体例を少し挙げてみたい。

前々からアルパインクライミングに最適なテントが欲しかった。常日頃考えているイメージを概略図にまとめ、ヘリテイジ社の野中氏を訪ね、綿密な打ち合わせをおこなった上で特注テントを製作していただいた。試作品を明神岳の冬季登攀でテストし、再度改良を加えて完成にいたった。2人用最軽量テントの底部分を丸々全部吹流し構造に、サイドのベンチレーターはヘルメットをしていても頭が出せる大きさへ、また不安定なお座り

ビバーク時にはポーターレッジのフライのようにビレイループとモノポールが使えるようになっている。このテントには私達2人、そして野中氏のクライマーとしての感性がつまっていると自負している。この作業はとても嬉しい思い出ともなった。（*ヘリテイジ社からスポンサードされていた訳ではない。念のため。）



実際のクライミングには80mロープを使用した。核心部では9.4mmシングルでリードし、セカンドは8.0mmでビレイされながらユマーリング。他は通常のスタカットで進んだ。これだと最大160mを連続で登ることになり、高所では大変な拷問となるがなんとか耐えることができた。おかげでクライミングスピードはかなり上がったのではないだろうか。アンカーの取れない雪壁ではロープを接続して160mロープにして使った。標高差1,900m、43ピッチのルートを頂上から連続14時間あまりで下降することができたのもロープスケールの選択が正しかったからだと思う。

食料については概ね、国内の山行で検証済みであった。（アタック食は全て日本から用意）。高所登山では一般的な α 米やインスタント麺類などフリーズドライ食品をつかった。特にカナダ製マウンテンフーズは優れものだ。注意したのは塩味のものを主体にした点である。甘いものは時とし

て全く身体が受け付けなくなるものだ。チョコレートなど普段は好物だが高所でそれだけだと大変キツイ。

今回はカーボショット（マルトデキストリン含有飲料）を使った。（行動食は1日/1人=3本、最終ピバークでのメインディッシュ）食べやすく、水がなくとも腹に流し込めるのでとても良い。しかし多少重量が増すのが痛いところだ。



おわりに

アルパインクライマーとしての進歩があった。それはひとえに国内の冬季登攀でパートナーとなってくれた方々のおかげだと思う。毎回の山行が中味の濃い有意義な研修であったと思う。自ら企画したウインタークライマーズミーティングもとても素晴らしい体験だった。少なくとも私達には特別な講師などは必要ない。アルパインクライマーでありたいと願うことそれだけで前に進むことができる。

2008年度は私達の遠征出発前までに親しい仲間たちが素晴らしい成果をあげてくれた。それは私達自身の直接的な応援ともなった。「あいつ等にやれるなら俺達だって」という思いは全ての思考を前向きにかえてくれる。テンカンポチェの成功は志を同じくした素晴らしい攀友達のおかげである。あらためて感謝申し上げたい。

メンバー

岡田 康（隊長） 36歳 松本CMC所属

馬目 弘仁 39歳 松本CMC

日程

10/20 出国

10/28 BC（テンポロッジ 4350m）

10/31~11/3 高度順化活動（パルチャモ峰6279m 登頂）

11/9 テンカンポチェ北東壁試登（下部岩稜終了点 5100m往復）

11/12 アタック 5100m

13 5650m

14 6150m

15 AM10時45分登頂～10分後下降開始

16 AM12時30分 取付点（4600m）着 ～ AM1時30分 BC着

*新井 健二（32）松本CMC、長門 敬明（28）秀峰登高会 のパーティーとの合同隊

彼らはテンカンポチェ北東壁左側を6250mまで登攀～同ルート下降